

2021年6月13日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「小羊の血と証しの言葉とで」

聖書：ヨハネの黙示録12:1～18

ここに「一人の女が」出てくる。この女性は誰を、何を想定しているのか？「女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた」とあり、そして、「竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた」とある。この女の人に対していくつかの解釈はあるが先ずは、この女性は母マリアだと見る。母マリアが子を産む苦難の中にある。そして「竜」は、新しい王が生まれると聞いて、二歳以下の男の子を一人残さず殺害するように命令した、あのヘロデ王のことを言っているとも受け止められよう。

「女は荒れ野へ逃げ込んだ」(6節)とある。荒れ野とは、何も無い所、人が生きて行けない場所。出エジプト記に荒れ野での40年にも及ぶイスラエルの旅が記されている。本来なら人が生きて行けない場所でありながら、神はイスラエルの民を荒れ野へと導く。それは、人が生きてるのは、自分の力ではなく、神によって生かされていることを知るためだった。荒れ野で人は神と出会い、神への従順を学び、神によって育まれていく。荒れ野において神の臨在を経験する。「女は荒れ野へ逃げ込んだ」とは、神に委ねて生きるという意味が込められている。自分の力で、人の力で生きてるんだというところにサタンは入り込んでくる。

ここに登場する「女の人」は、全体的に見るならば、マリアよりも、教会、あるいは、キリスト者へと解釈の広がりを見る。キリストを産む、キリストを発信する教会は、キリスト者は、皇帝崇拝の抑圧の時代の中で、産みの苦しみに合うというもの。竜は子を産もうとしている女の前に、教会の前に、立ちはだかり、キリストを産む、発信するならば、その教会を、キリスト者を食べてしまおうとしているわけである。しかし、キリストを産み出すもの、発信するものよ、荒れ野に逃れよ、神に委ねて生きよ、・・・ということ。そして大事なことは、「兄弟たちは、小羊の血と自分たちの証しの言葉とで、彼に打ち勝った」(11節)。小羊の血とは、十字架のイエス・キリストのこと。そのキリストを自分たちの証しの言葉とで語り通す時、教会は、キリスト者は、竜に打ち勝つのだ。

今、この世において十字架のイエスとは何か？それは、この世のどこに苦難や悲しみ、嘆きの場所があるのか。それは同時に、そこに十字架のイエスが共に居られるということ。そのことを覚えながら、私たちの教会は、キリストを産み出しているのか、発信しているのかを考えて行きたい。また、教会は、この世に落ちてきた竜の存在を見極めていくのかを、同時に考えて行きたい。(神谷)